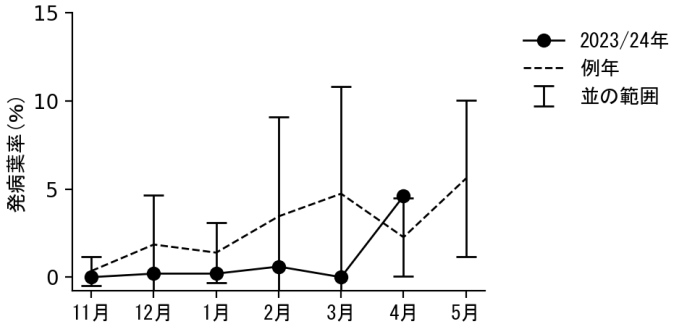
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	① うどんこ病			
調査結果	4 月の発生量（例年比）	やや多		
予　報	4 月からの増減傾向	↗		
	5 月の発生量（例年比）	並		
予報の根拠		例年の発生量の推移（↗）		

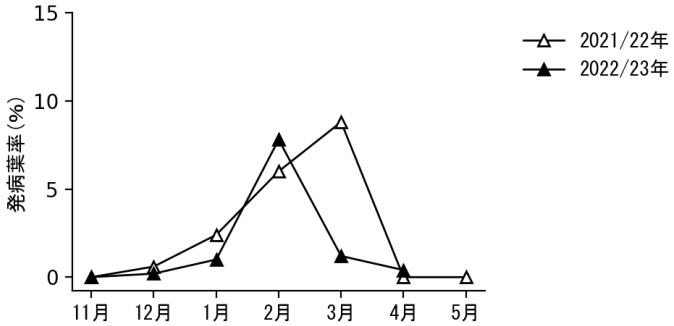
調査結果

発病葉率の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率40.0%（例年：33.3%）

防除のポイント

・多湿条件で発生し、その後乾燥が続くと被害が拡大するため、湿度管理に注意する。

・過繁茂を避け、透光通風を良くする。

・老葉や病葉は伝染源になるので除去し、施設外に持ち出し処分する。

・多発すると防除が困難になるため、予防散布に重点をおく。硫黄粉剤による予防は効果が期待できる。

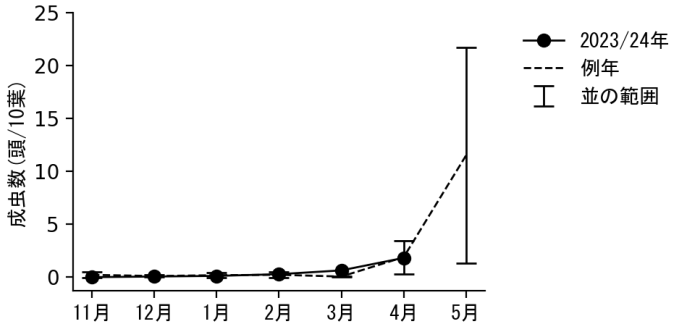
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	② ミナミキイロアザミウマ			
調査結果	4 月の発生量（例年比）	並		
予報	4 月からの増減傾向	↗		
	5 月の発生量（例年比）	並		
予報の根拠		例年の発生量の推移（↗）		

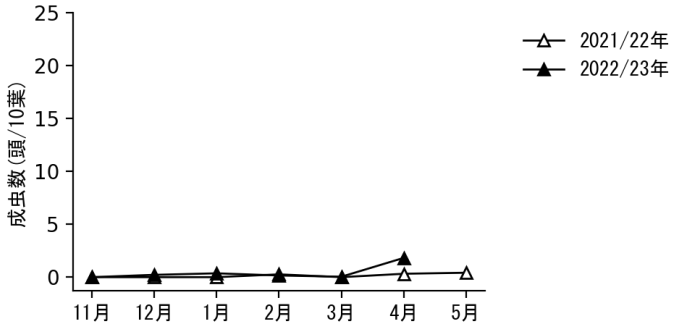
調査結果

成虫数の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率60.0%（例年：66.7%）

防除のポイント

・本種はスイカ灰白色斑紋ウイルスを媒介する。
・多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
・施設の出入口や天窓は目合いの細かいネット等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
・多発すると防除が困難になるので、つる先や葉裏をよく観察し、早期発見・防除に努める。
・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

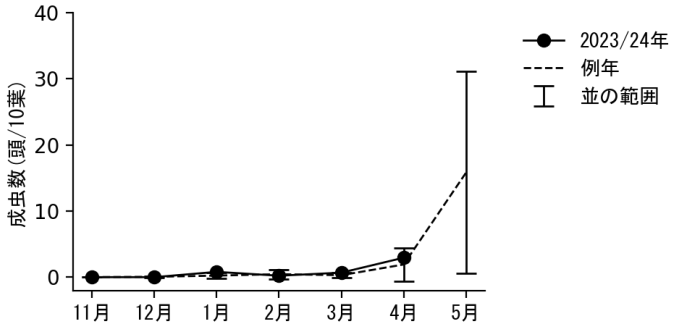
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	③　タバココナジラミ		成虫	
調査結果	4 月の発生量（例年比）	並		
予報	4 月からの増減傾向	↗		
	5 月の発生量（例年比）	並		
予報の根拠		例年の発生量の推移（↗）		

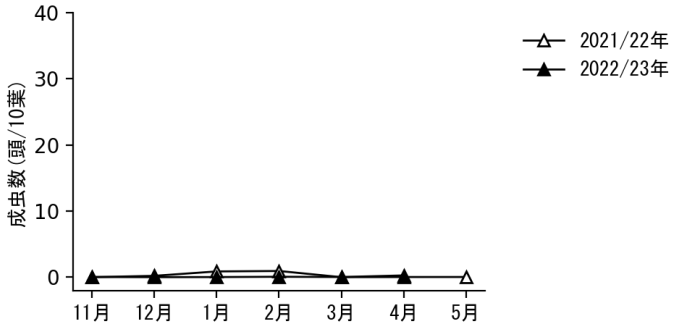
調査結果

成虫数の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率60.0%（例年：26.7%）

防除のポイント

・多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。

・施設の出入口は目合いの細かいネット等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。

・黄色粘着テープ等により、早期発見・防除に努める。

・幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。

・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避け、気門封鎖系等の薬剤も利用する。

幼虫

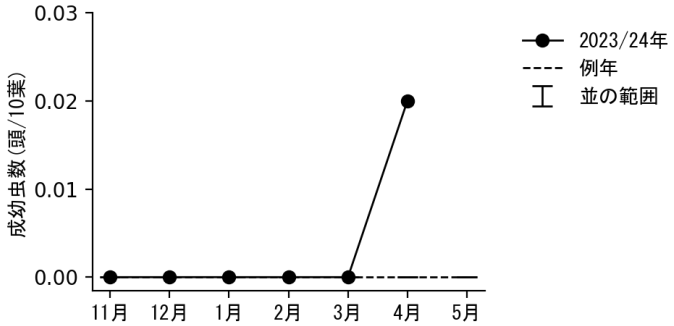
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	④　アブラムシ類			
調査結果	4 月の発生量（例年比）	多		
予報	4 月からの増減傾向	→		
	5 月の発生量（例年比）	多		
予報の根拠		例年の発生量の推移（→）		

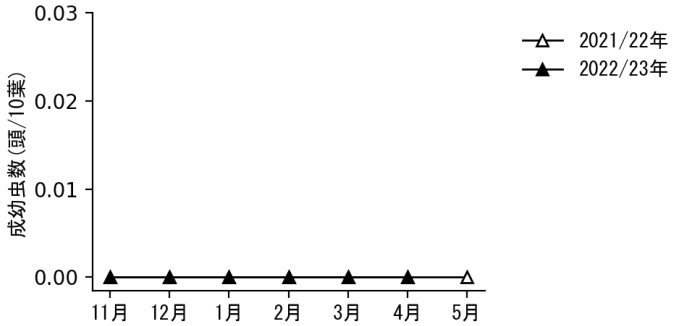
調査結果

成幼虫数の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率20.0%（例年：0%）

防除のポイント

・アブラムシ類はズッキーニ黄斑モザイクウイルスやパパイヤ輪点ウイルス等を媒介する。
・多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
・施設の出入口や天窓は目合いの細かいネット等で被覆し、有翅虫の侵入を防ぐ。
・早期発見に努め、薬剤が葉裏にかかるよう丁寧に散布する。

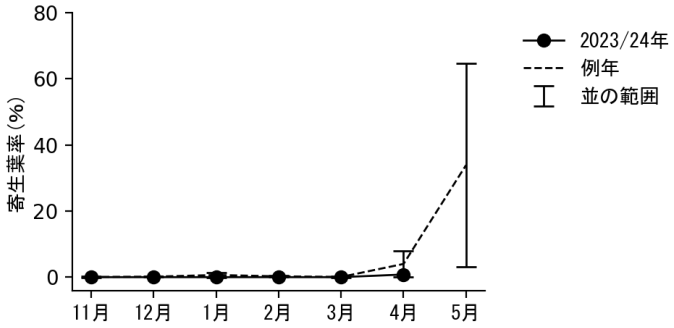
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	⑤ ハモグリバエ類			
調査結果	4 月の発生量（例年比）	並		
予報	4 月からの増減傾向	↗		
	5 月の発生量（例年比）	並		
予報の根拠		例年の発生量の推移（↗）		

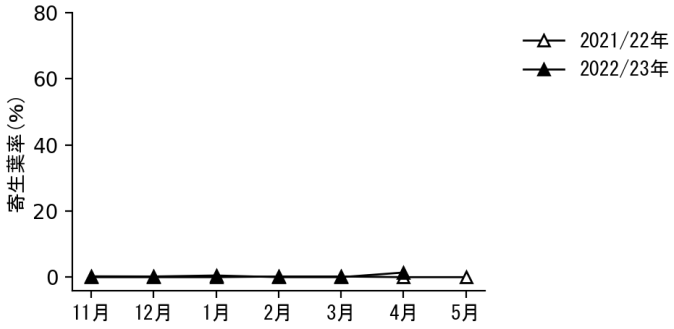
調査結果

寄生葉率の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率40.0%（例年：33.3%）

防除のポイント

・発生源となる施設内外の雑草除去に努める。

・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

・幼虫期間が短いため、葉面に産卵痕や食害痕が見え始めたら防除を開始する。

・防除効果は幼虫の体色で判断する。生存時は黄色で死亡すると黒変する。

幼虫の死骸
（農薬などで死亡すると黒色に変色）

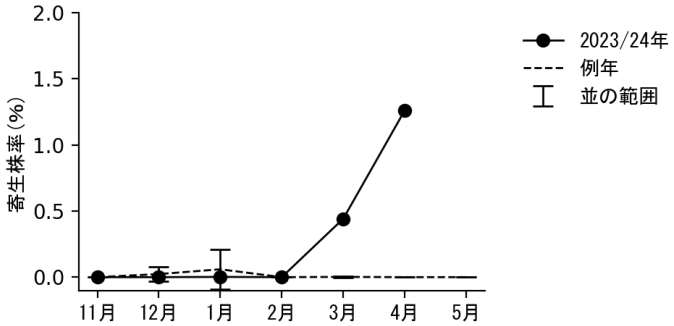
令和　6 年度　　5 月予報

作物	とうがん(施設・立体栽培)		地域	宮古群島
病害虫名	⑥ ハダニ類			
調査結果	4 月の発生量（例年比）	多		
予報	4 月からの増減傾向	→		
	5 月の発生量（例年比）	多		
予報の根拠		例年の発生量の推移（→）		

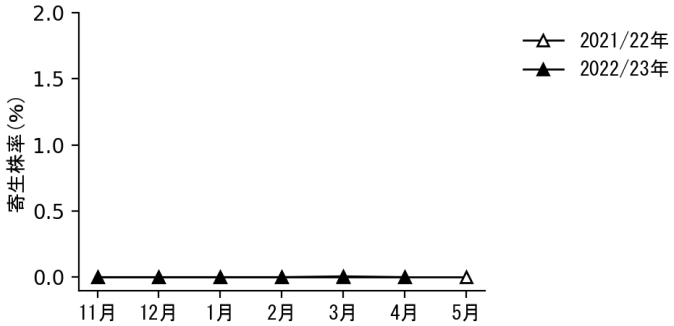
調査結果

寄生株率の推移

＜今期と例年＞



＜過去２年＞



・発生施設率60.0%（例年：0%）

防除のポイント

・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。